

『科学魔法』 使いの旅

akuo

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある世界。

空間移動、世界間移動によって栄えるこの世界から

一人の少年が旅立った。

ある魔法を生み出し、

その魔法を使いこなす少年。

その実力は高く評価され、
その評価を裏切らない実力を持つ。

その少年の旅の目的は・・・

「面白い世界で遊んで暮らしたい」

そんな少年は

どんな世界に行くのか、

どんな世界へ旅立つのか。

少年、いや

『科学魔法』使いの旅を

ここに綴ろう。

高確率でgdります。どちらかという在日常系になるかもしれませんが
まったりやっつけていきます。

基本的に主人公目線で書くので、主人公になった気分で見ただけならば(?)
多重クロスは予定です。

目次

魔法科高校の劣等生編

プロローグとはじまり | 1

お兄様を不用意に怒らせてはいけない

| 10

日常回（大嘘） | 23

シリアス回が続いて鬱になってきまし

た（ヤケクソ） | 30

同類との邂逅「ネタ（意味深）」

38

普通とは（哲学） | 42

やはり俺の発想はまちがっている。

（小並感） | 53

説明回「深刻な説明力不足」 | 61

放課後最終防衛ライン「ゲームマーの決

意」 | 68

ノーデュエル・ノーライフ！（カード

ゲームじゃない方） | 80

設定集（） | 88

魔法科高校の劣等生編

プロローグとはじまり

「まじかよ・・・(´・ω・｀)」

何突然絶望してるんだ、と思うだろう。

誰だか知らないけど説明しなきゃいけない気がしたから説明しよう。

順を追って説明しよう。そうだそれがいい。

俺が「ランダム世界間移動」してきたのは、元来た世界と同じく、『魔法』のある世界だった。

しかし、魔法、と言ってもなんと『CAD』という道具を使うらしい。

なんだそれは。かつこ良ゲフンゲフンいちいち不便だろう。

そう思い持ち込んだその場所の通貨になるマジックアイテムを使い

(世界間移動が普通だからこのくらいはあるのだ)、

この世界の通貨で早速購入した。

それがどうだ。よくできている。実に面白い(キリッ)

そして何より・・・

かっこ良い。

調べたところ、特攻型、じゃなかった『特化型CAD』というらしい。名前からセンスを感じる。

詠唱や魔法陣、杖や魔導書の代わりになるものらしい。利点は魔法を組み上げるのがくそ早いこと。準備が十分の一以下の時間で終わる。

この世界の魔法は、「超能力」とこの世界で呼ばれていた先天的な能力の使用法を「魔法式」として体系化し、素質ある者が使用できるようにしたもの。幅広い汎用性を得ているのが特徴だつてよ、ミカア！（ふざけ）

魔法は、「事象に付随する情報体（エイドス）」を改変する事で事象を改変するんだつてよ。エトセトラエトセトラ。

素質は必要。ここ大事。

ほかにもいろいろあるんだが、その時説明すりやいいよね。だけどこれは説明しないといけないな。

魔法の使い手である『魔法師』を育成する魔法科高校なる高校があるらしい。

・・・そして俺の容姿は背の高い男子高校生で十分通る。

書類関係はどうかする技術が俺みたいな旅人用にある。

これがバレた実例は報告されていない。

もうわかるだろ？俺はそこに入学する！した！2か月で！（暗記魔法は使った。）しかし問題がある。

最低限しか勉強ができなかったんだ俺は。暗記魔法はクールタイムがあるから。

・・・この世界には暗記魔法ないのか？ まあ、それは置いといて。

実技もそこその域を出ない。仕方ないね。

でだ。俺は二科生だった。それはいい。俺は上機嫌だった。

それゆえに早く俺は登校した。

そして今に至る。

だがな・・・

差別意識激しいな、こいつぁ。

魔法科高校は試験の成績の高かった生徒の一科生とそうでない二科生に分かれてい
る。

しかし、心理的要因で魔法が使えなくなることも少なくないらしい。

毎年多くの生徒が退学するそうだが。

そのため、二科生は魔法事故によって魔法を使えなくなった一科生の補欠でもある。むしろその意味合いが大きい。

それには魔法師不足の解消という意味もある。毎年百人魔法科大学に送らなきゃらしいからな。

また、違いとしては、書籍や資料の閲覧権はあるが、もつとも重要な個別指導が受けられない。

教えられないことを前提の入学。要は自力で結果を出せ、ということだ。それができないのなら、魔法科大学には進学できない、ということらしい。

また、わかりやすい違いとしては、一科生の制服の左胸には八枚花卉のエンブレムが刺繍されている。

しかし、二科生の制服にはそれが無い。

そこから生まれたのが一科生を花冠^{ブルーム}、二科生を雑草^{ウイード}と呼ぶ風潮だ。

校則で禁止されてるらしいが、今日だけで10は聞いた。生徒会も風紀委員も大変だなあ

(小並感)

それに一通りうんざりした俺は、ベンチで休んでいた。すると、すぐに青年が隣、良いか？」

と声をかけてきた。

左胸にエンブレムは無い。

まあ、俺みたいなのやつももいるよね。

「どうぞで」

そう促すと、彼は座って読書を始めた。

もはや条件反射で読書（ただし紙ではない）をしている端末を覗き込んだ。

こ、これは・・・！！

「ガン〇ムじゃねえか・・・」（団長並感）

「知ってるのか？ だいぶ前の作品だが」

知ってるさ。前いった世界の一つで見たよ！ しかも古いつてなんだよ！ それ俺見た

ことないよ！

さすが2095年！ この世界は西暦2095年です！ はい！

「まあな」

「好きなのか？」

「まあまあだ」

「まさかこんなところでこんな奴と出会うとはな」

その言われようは誠に遺憾である。

でもまあ、

「気が合いそうだな。俺は荒海あらくみ 蒼そうだ。よろしく」

「面白い人種だな。俺は司波しば 達也たつやだ。こちらこそよろしく。」

面白い奴だなつと、思った。

そんな感じに話していると、

青年……達也のディスプレイに時計が表示された。

それをもって式場の開場の時間を確認し、立ち上がろうとしたが、

「新入生ですね？開場の時間ですよ」

という第三者の一言で離陸に失敗した。

俺は開場の時間ですよ、ってなんかごは○ですよみたいだな、この世界にもごはん○

すよあんのかな。

などと一通り考えた後、その少女に目をやった。

まず目についたのは左胸にある八枚花弁のエンブレムと女物の制服とスカート（当然

だ）、それに最新型だった気がするCAD。

たしか普及型よりも薄く、ファッション性も考えられたCAD。

多くの魔法師が好むブレスレット形態のCAD。おそらく汎用型だ。CADには特化型と汎用型がある。

特化型は同じ系統の（この世界の魔法は4系統8種とその他でおおよそ分類される）9種類のみを展開できるおもに拳銃型のもの。

汎用型は系統を問わず99種類の魔法を格納できる主にブレスレットや携帯端末型のもの。

その代わり特化型より遅い。仕方ないね。

しかし、魔法科高校では、CADを普通は持ち歩けない。にもかかわらず持ち歩きが許可されているということは・・・生徒会か一部の委員だ。

達也と話をしていたのを聞いたところ、生徒会長だったらしい。わー！あなたは生徒代表なフレンズなんだねー！すごい！体形は小柄だが割とグラマー、といったところだ。

そして達也が筆記一位ということが発覚した。お前すげーな。

それ以上は聞き取れなかった。主にごはんです○について考えてた所為で。しかしもう一つわかったことは「七草^{さあくさ} 真由美^{まゆみ}」という名前だ。

生徒会長の名前だ。どうせすぐわかっただろうが、驚いた。

数字^{ナンバース}付き……即ち魔法師のエリートを意味する名字に数字の入った家系のことなのだ
が

さらに別格だった。十以下の数字を持つエリート中のエリート。

最強クラスと言いつてもいい実力をもつ十師族の家系だった。なんてやつだ。

「そろそろ時間ですので……失礼します」

達也は、まだ何か話したそうな真由美を置いて行った。

そして俺は、その対応に心の中でため息をつきつつ、

俺に話しかけようとしていた会長を置いて歩き出した。（かなり歩調は速い）

いや、逃げた！（断定）

俺は聞き逃していなかった。

会長の自己紹介はこうだったんだよ。

「あつ、申し遅れました、私は第一高校の生徒会長を務めています。七草 真由美です、

七草^{ななくさ}と書いてさえぐさと読みます。よろしくね」

どこのラノベのヒロインだよ。

そして俺は感じ取った。これはヤバイ。何かわからないがやばいタイプだぞ、これは。

「あつ、待つて！」

声で呼び止められたのを無視すれば角が立つ。

一応振り向く。

「きみ、名前は？」

「荒海 蒼です」

「わたしは「もう聞きました」あ、そう？」

そうすると俺は言葉に割り込んだにもかかわらず
くすつ、と笑った。

「蒼くんって、面白いわね」

そして俺は、今度こそ逃げだした。

お兄様を不用意に怒らせてはいけない

あの一連のの騒動（災難？）の後、俺は会場に向かった。

まだクラスは発表されていないため、クラスでまとまっている、ということはない。

しかし、一科生は前半分、二科生は後ろ半分と綺麗に分かれていた。

俺としては、堂々と（？）まったり（ただし話をちゃんと聞くとはいってない）できるので、文句はない。

ときとーに席を見繕っていると、達也を見つけた。

「やつはろー。X分ぶりだな。Xを求めろ。」

「・・・おう」

はっはっは！さすがの（？）達也もこれほどのボケは処理しきれないか！

「で、どうした鉄○団の団長？」

「誰が○華団の団長だコラ」

くそつ、俺が鉄華○の団長だと？ 止まるんじやねえぞ・・・！

などと考えていると、

「お隣、空いていますか？」

と少女たち（正確には4人）から声がかかった。

「どうぞ？」

という言葉と促すモーションとともに達也とスイッチする。JKは俺の手に余る・・・ッ！

ん？でも俺はこれからこの高校で一日の生活の大半を過ごすわけか。・・・詰んでね？

なんだかんだ達也と少女たち（正確には以下略）の会話が成立しているのを確認して、俺はまったりタイム（寝ないとは言っていない）を開始しようとした。

そう。しようとしたんだ。

だがしかし！そんなに現実には甘くない！

「「・・・」」

少女たち（以下略）のうち2人＋達也がこっちを向いているんだよ。

「俺、何かしました？」

してないはずだがな。してたら音速越えて土下座して衝撃波で会場を吹き飛ばす！

（大嘘）

ここに助け船を出してくれたのは達也だった。

「蒼。自己紹介だ。」

理解した。

選択肢タイム

- 1、まじめにする
- 2、ふざける
- 3、ふざける
- 4、ふざけるなッ！（理不尽）

A、安定の1

「俺は荒海 蒼だ。（・・・▽・）ノヨロシク」

ちよつと待て。俺はまじめに言つたはずだぞ。なんでこんなふざけた感じになつて
いるんだ。

などと俺が葛藤しているうちに、

俺が話を（一切）聞いていなかったことを理解したらしく、

「柴田 美月みづきつて言います。よろしくお願いします」

「あたしは千葉 ERIえりカ。よろしく、二人とも。」

自己紹介が行われた。

美月、と名乗った方の少女は黒髪に眼鏡。クールな感じ、というより気弱そうな少女だ。

エリカ、と名乗った方の少女は明るい色のショートヘアの髪型。はつきりした目鼻立ちで活発そうな少女だ。

元も子もないことを言えば調べたほうが早いかもしれないが。(読者としては)

しかし、この世界で眼鏡か。確か視力は何とかする技術が発達して視力低下は絶滅状態だったはず。

それに、もし悪かったとしても、無害で年単位で使えるコンタクトがあったはずだ。

それに、この眼鏡に度は入っていない。ファクションでこうする性格でもないだろう。

となると、見えすぎ病、とかいうやつか。

なんか想子サイオンとかいう、超心理現象・・・要は魔法チックな非物質粒子で、認識や情報を記録する素子とかいうわけわかんないやつ(ちなみに魔法の時使うのもこれらしい)とかいう感じのやつとかあるんだが、

もう一個の霊子フシオンとかいうやつが魔法とかに反応したりして魔法チックな光を出すらしい。

それを靈子反射光といって、それに敏感すぎんのがが見えすぎ病こと靈子反射光過敏症だ。

靈子自体がなんか情動を形作るとか言われてるだけあって、それを感じ取りすぎると

精神の安定が崩れやすいらしい。それを技術でカットするのがあれ、

「オーラカットレンズ」だ。

人のオーラが明確にわかんのかな。だったらすげえわ。

ちなみに魔法に使う想子サイオンとこの靈子の感受性は比例するらしく、

想子サイオンを扱う魔法師には珍しくないらしい。魔法師以外にはサイオンとか感じられないらしい。

魔法師もプシオンは感じるって感覚で普通は見えないらしい。肉眼では。

感受性を制御したりすることで何とかなるらしいが（以下略）。

ちなみにオーラカットレンズの構造は実際見て何となくわかった。伊達に『科学魔法』名乗ってない。

制御しきれないってだけであかも重い症状になるとは思えないし、

要するに美月は魔法チックないろいろを感じすぎる、見えすぎるってところか。

説明長引いたからエリカの方は簡単に言うぞ。

数字ナンバーズ付きの傍系だと思ふ。以上。

それも魔法と従来の白兵戦技を組み合わせた白兵戦を得意とする家系だ。

・・・見たか！勉強に飽きてPCで探ってた知識が役に立ったぜ！

・・・詳しく知りたい読者の方はググってください。

とか考えてたら達也に肘で突かれた。

「もうすぐ新入生総代の挨拶だぞ」

「なにそれおいしいの？」

「一応新入生なんだからなお前」

「そーいやそーうだった」

なんてコントを繰り広げていると、

「新入生総代、司波しば深雪みゆきさん」

と、女の子が呼ばれた。

「お前の・・・妹か、主席とはすげーな」

達也は少し驚いた顔をして、

「何で分かった？」

と、聞いてきた。

俺は迷いなく、

「お前はシスコンしてそうだから」

って言ったら肘で突かれた。 さつきよりかなり痛い。 秘孔を突かれたのかな？

「嘘だよ。 オーラが似てたから」

オーラという表現は多分さつきに引つ張られた。

俺の答えにひとまず達也は納得したようだった。

・・・内心で俺は、達也に本気でシスコン疑惑をかけていた。

聞いてくれ。

俺は無事個別認証を終え学内用カードを受け取った。（これと同時に在籍するクラスが判る）

俺は1年E組に在籍することとなった。（ちなみに一科と二科ではクラスが分かれて
いる）

エリカや美月、達也も同じクラスだ。

とはいっても達也が妹と待ち合わせているらしく、俺らもついていく運びとなった。

・・・なつてしまった？

まあいい。話を現在いまに戻そう。

「へえー、司波くんの妹なら、さぞかし可愛いんじゃないの?」

俺らの新入生総代のときの話をエリカは聞いていなかったらしい。

というかなんだ。達也。さっきのエリカの発言は暗に☒達也君かつこいいから妹さんも可愛いんじゃない? ☒

というニュアンスを内包していたよな?

・・・ちよつと後で達也とは O☆H A☆N A☆S I とても大切な話が必要だな。

そこで美月が、

「妹ってもしかして・・・新入生総代の司波 深雪さんですか?」

と核心的な質問を行った。

だが反応を先にしたのは

「えっ、そうなの? じゃあ、双子?」

エリカの質問だったが。

「よく聞かれるけど双子じゃないよ。俺が四月生まれで妹が三月生まれだ。」

という達也の声によって解決がもたらされた。

すると美月が、

「蒼さんは兄弟はいないんですか?」

という質問がもたらされた。

「いないけど?」

と簡潔に答えると、

達也の

「話が変わるが、なんで兄妹だつてわかつたんだ? 司波なんて、そこまで珍しい苗字でもないと思うが」

という質問（助け舟?）に話題はすり替わった。

「面差しが似ていますから・・・」

「似てるかな?」

前者が美月、後者が達也だ。　　こら、気弱な女の子を問い詰めないの！（わざとらし

い勘違い）

「見た目だけでなく仕草とかで感じたのかもかもしれないな。」

と、俺は一言。

エリカはサラッと

「ほら、達也君イケメンだしさ。それに、雰囲気みたいなものが似てるよね。」

という我ら非リア部隊二次元科士官としては許しがたい発言を前半に放った訳だが、

「お二人のオーラは、凜とした面持ちがよく似ています」

という美月の発言に、俺の意識は向いた。

やっぱオーラとか見えんの？なにそれかつこいい。

エリカがその表現に大きく同意していたが、

「エリカ、君って実は、お調子者だろ」

そう前置きし（エリカの、ヒドイ、という形ばかりの非難は黙殺された）、

「柴田さん、オーラの表情が見えるなんて、本当に目がいいんだね」

そう達也が返すと、美月は固まっていた。

・・・俺が言わなくてよかった。俺なら、間違いなくああされたら対応に困る。

などと考えていると

「お兄様、お待たせいたしました」

と、司波妹がやってきた。

容姿は10000人いたら9500人は☒美少女☒と答えそうな少女。

つやのある長めの黒髪に、落ち着いた、まさしく凛としたたずまいだ。

「お兄様、その方たちは？」

何っ、自己紹介が先じゃないだど!?!いや、それよりも・・・

「新しいクラスメイトだ。」

達也が簡潔に説明すると、

「じゃあ、さっそくお兄様はクラスメイトとデートですか？」

「……俺はクラスメイトとして扱われていないらしい。」

ただ話してただけだよ、そんな態度はクラスメイトや彼に失礼だよ、という達也のフオローもあり、

自己紹介が始まった。

「私は司波^{しば}深雪^{みゆき}です。私も新入生ですので、お兄様同様、皆さんよろしく願いますね。」

「私は（以下略）」

「……自己紹介はもう飽きただろ？」

あと、ざつくばらんな態度が気に入ったのか、エリカと意気投合していた。お世辞ラツシユだったろうしな。気に入るのもわかる。

俺がぼーっとしていると、達也と深雪とその他が話していた。

「深雪、生徒会はもういいのか？」

という達也の問いかけに、

「大丈夫ですよ」

応えたのは……ラノベヒロイン系生徒会長、七草さんだった。

深雪、生徒会入んのか。主席は入る慣習があつたんだっけか。

「今日はご挨拶だけでしたから。深雪さん、詳しいことは、また後日にね」
「あつ、はい」

その空気に割って入ったのは、なんかわからない男子委員だった。
その左胸に咲き誇るは、八枚花弁のエンブレム。

「しかし、それでは予定が・・・」
という委員に

「そこまで急ぎでもないですから。もともとの予定を優先するべきでしょう？」
と会長が返した。いい判断だ。

まだ食い下がりそうな男子委員を目で制し、

「司波さん、ではまたゆっくりと。達也君に蒼君も、またね」

と会釈して立ち去った。

男子委員は帰り際に振り返ると、達也を睨みつけて帰っていった。

あの男子生徒、無念よな。

だつておそらく、

「シスコンとブラコンだよな。断言するわ」

達也にはひじで突かれ（相変わらず痛い）、深雪には足を踏まれた。

なんでや！（某デスゲームサボテンヘッド並感）本当のことやろ!?

やっぱ本当に大事なことって目に見えないんだな（戒め）
・ ・ ・ ・ ・ お兄様呼びは本気でやばいと思いました。
あの後散々な目にあつたのはまた別のお話。

日常回（大嘘）

あの後、俺たちは下校した。

といつても、深雪にエリカに美月、三人もJKがそろえば（俺と達也は例外）、何かあるわけで。

「おいしいケーキ屋さんがあるらしいんだ〜」

発言（b y エリカ）によってティータイムになった。

ちなみに途中、

「お兄様、どういたしましょうか？」

（b y 深雪）からの

「いいんじゃないか。せっかく知り合いになったことだし。同性、同世代の友人はいろいろいても多すぎないからね」

（b y 達也）というお互いのことしか考えない（自身も度外視）の発言に、

「司波くんって、深雪のことになると自分は計算外なのね・・・」

「妹さん思いなんですわね・・・」

「やっぱシスコンとブラコンじゃ（殴）・痛い痛いその秘孔をつくなア！」

という三人の批判とも称賛ともとれる（ただし俺は冷やかし。異論は認めるが反論は認めん）意見が述べられた。

ていうか達也も俺を同性、同世代の友人（以下略）のときに居ない扱いしてませんか？

しかもなんで俺だけ秘孔突かれたの？誠に遺憾である。

エリカの紹介したケーキ屋はデザートのおいしいフレンチのカフェに近かった。

そのためそこで昼食を取った。

J K達は女子トークに興じ、俺たちは、

「エヴァ○ゲリオンって魔法で再現できるか？」（by俺）

「いや厳しいな。そもそも生命を組み込むというのが・・・」（by達也）

「いや、それは人間の精神の^{フシオン}霊子を抽出する形でいけるんじゃないか？」

「いやでも神関連やコクピットの問題が・・・」

などと話していた。暇だったからね。仕方ないね。

結局J K達の短くないおしゃべりが終わったところで、今日はお開きとなった。

そして俺は家(ただしデパートの一室。借りるのは面倒なので(?)買った。)にいた。この世界は科学が発達していて、HARというホームオートメーションロボットが充実しているため、

家事を丸投げし、ずっと作業をしていた。案外面白いものができた。

そして翌朝。かなりの早朝。

暇だったので近所の寺(実際は道場に近いが)に向かってみると、

坂を移動系魔法で干渉したローラーブレードで滑り上る深雪と、

同じく魔法を使つて十メートル以上歩幅で走る達也を見つけた。(達也のトレーナー

に対し、なぜか深雪は制服だった。) 速度は時速60kmほどで、さすが一科生と達

也だ。

達也はなんか常人でないオーラがすごいよな。あの感じといい、あとは勘だけど。

話しかけたいところだが、俺はもう一つの気配に行くことにした。

理由は戦場を潜り抜けた魔法使いの勘だ。

だが俺はその先を見て大いに驚いた。

俺が魔法師対策に手に入れようとして諦めた「アンティナイト」がそこにあった。

否、持った少年がそこにいた。

アンテナナイトはサイオンを流すことで、

☒キャスト・ジャミング☒と呼ばれる不規則なサイオン波を放出して、

魔法の発動を限りなく困難にする希少で高価、かつそもそも入手困難な軍事物資だ。

かつ想子^{サイオン}を注ぐだけで発動するため、非魔法師でも使える有効な魔法妨害手段だ。

（入手が非常に困難な点を除けば）

その方向が魔法によって動いている司波兄妹に向いているのを確認して、

俺は攻撃を開始した。

俺はCADの銃口をむけ、引き金を引いた。

すると少年は、ある範囲から出れなくなった。檻に囲まれたように。

恐怖で思考⇨キャスト・ジャミングを使うことが思考の埒外にあるうちに問いかけ

る。

やったことは俺の得意分野の応用だ。

この世界の魔法の一つ、硬化魔法。

原子レベルの相対座標を固定することで、物質が変化しない⇨壊れないものを作る魔

法。

それを俺は相手の周りの空気に行使した。想子^{サイオン}の消費を抑えるため檻状に。

すると空気は、一切動かない檻となる。

科学を使い魔法を強化し、魔法を使い科学を強化する。

それが『科学魔法』。

だが、狭いとはいえ、顔は動かせる。だから俺は聞いた。

「お前には2つの選択肢がある。

一つ目はアンテナイトを渡し、かつこれから敵対行動を一切行わないことだ。」

少年は俺を睨みつけてきた。

俺は構わず、二つ目の選択肢を提示した。

「二つ目は一つ目を蹴り、俺に敵対行動をとれない体にされることだ。」

少年はできる範囲で後ずさって、こちらを見てくる。

ただしその目のニューアンスは、憤りではなく、恐怖だった。

「答える。俺も暇じゃない。あと、俺にキャスト・ジャミングなんかは今更効くと思う

なよっ。」

少年の思考に恐怖で消えてなかった選択肢までも否定され、彼はアンテナイト付きのプレスレットをおずおずとこちらに差し出した。

「所属する組織はなんだ？」

彼がひとりで手に入れることができるようにはとても思えない。

「ぶ、ブランシュって団体です」

「よし、ならもしブランシュにお前がなんかされそうになったら俺に言え。」

「あ、あなたは……？」

「俺か？ 荒海 蒼だ。」

「こ、高校生みたいですね……」

「え？、俺、高校生だけど？」

「え？……てことは、第一高校の？」

魔法科高校は全国で九校ある。一校が一番頭がいい（魔法力がある）と言われている。

「一校の一年ですよ？ 1年E組の」

「二科生なのか……しかも同級生……」

「一科生だったのか？」

「いや、僕も二科生だよ」

「そうか、名前は？」

「二年G組、天の川あまのがわ 恒星こうせいだよ」

「そうか。得意魔法は？」

相手は俺の得意魔法を勝手に硬化魔法だと勘違いしてくれているだろう。

「僕？ 僕はBS魔法師なんだ。」

「じゃあ、その魔法を見せてくれるか？」

すると少年・・・恒星はバツの悪そうな顔をして、

「ごめん、今は出来そうに無いかな」

まあ、精神が落ち着いてないだろう。

魔法は精神状態に大きく左右されるし、CADも無しでは厳しいのも頷ける。

「わかった。じゃあ、電話番号を交換して、都合のいい時にな。」

「わかった。」

その時俺はまだ知らなかった。彼があんな魔法をあんな秘密ともに隠し持っていたなんて。

A f t e r t h e n e x t n e w m o o n . . .

シリアス回が続いて鬱になってきました（ヤケクソ）

あの後、俺は当初の予定に戻り、寺院に向かっていた。

短くもないけど長くもない道のりを（魔法で）快走し、

門を潜った。

ここは九重このえ八雲やくもという忍術（古式魔法と体術などの技を組み合わせたもの）使いが
いる道場。

寺、というには強力な僧侶が多すぎる場所だ。

ちなみに前来て組手して大多数を薙ぎ払ったためある程度顔が知れた俺に真っ先に

「あ、もやし大将！」

と声がかかった。

先に来たらしい達也にボコられた（組み手の相手、ただし達也VS圧倒的多数の門人）
僧侶（というより僧兵）が立ち上がり俺の方を向いてこう言ったのだが、

まあ俺は黒髪蒼眼で、（見た目は）同年代の達也と比べてだいぶ細身ではある。（顔は客観的に見て上の下ぐらい）

とはいえ俺にもプライド（笑）というものはあるわけで、

「よし、俺をもやしだと思ってる奴表出る相手してやる」

これは半分ノリだったんだよ。だがな、

戦える状態のやつが全員立ち上がりやがった。

……焼き入れが足りなかったようだな。

「うわああッ」ボフッ！

「あべしッ！」ドサッ！

「そげぶ！」ピキィ・・・！

「止まるんじゃねえぞ・・・」パンパンパン

「団長オー！」ドスッ

悲鳴のバリエーションが豊かすぎる。

しかもネタ多くない？多いよね!?しかも体術なのに効果音がパンパンパンなのはおかしい！

まあそんなところで、

元の世界仕込みの体術と九重八雲の忍術（をパクった劣化版）を組み合わせ一通り薙ぎ払って、

俺は誰も見ていないことを確認し、

その左眼を黄緑色、というには神々しい緑系の色に染めた。

彼の生まれ持つ二つの異能の一つだ。

その眼を達也に向けた。

「なっ……」

彼は絶句した。

あまりに衝撃的過ぎた。

彼に視えたものは、

一方で達也も後ろの気配を察知して、

振り返っても姿が見えなかったため

（組手のときに使った気配をずらす元の世界の魔法が効いていた）、
彼の持つ眼を行使した。

達也の持つ眼、それは
『エレメンタル・サイト精霊の眼』。

この世界の情報を管理する情報体次元☒アイデア☒にアクセスし、全ての物体に付随する情報体☒エイドス☒を視る眼だ。

この世界の魔法のシステムについて説明しよう。

この世界に赤い球体があつたでしょう。

その物質を表す情報は、『エイドスおもに赤い光を反射する』、『球体である』という情報エイドスということになる。

そこに魔法で『おもに赤い光を反射する』を『主に青い光を反射する』という偽の情

報で覆い隠してしまう。

すると、青くなって見える。それが魔法の主な原理だ。

魔法を解除すると、覆い隠していた情報がなくなり、元の赤い状態に戻る。

そのため、達也の精霊エレメンタル、サイトの眼は魔法を視ることができし、

全ての物質を物理的距離をある程度無視して知覚することができる。

達也の知覚できないものは、真の意味で存在しないものだけだ。

それはすべての攻撃の予備動作、角度、敵の位置、武装などを障害物すら無視で確認できる。

それは戦闘、生活、その両方について圧倒的なアドバンテージだ。

物理的障害物を無視するものが多い魔法にこれを組み合わせるとき、

その照準サイトから逃れることは、困難を極めるだろうと、蒼は分析していた。

「達也がこっちを向いたのを見て、俺は俺自身の眼は解除済みだったので、俺は魔法を解除した。」

「俺がボコられるところを見てそんなに楽しかったか？」

「・・・どうやら達也は九重さんにボコられていたらしい。」

「まあ体術だけじゃ仕方ないんじゃないかね？知らんけど。」

「そう適当に返すと、」

「そうだよ。まだ半人前の達也君に負けるようでは、弟子に逃げられてしまいそうだ。」

別の声の主は、他ならぬ九重八雲だった。

見た目はスキンヘッド・・・あとはググってくれ。

ただ一つ言えることは、

無性に俗っぽい。

俗があふれている。これで大丈夫か？

などと考えていると、

「朝ごはんにしましょうか」

などと深雪が言っていたので、おとなしく（兄妹のために）引き上げることにした。

「俺は帰ろうかな、少し用事があるし」

ちなみに嘘ではない。達也には対策が必要だ。
・・・それさえ通用しないだろうが。

俺の自室。

「まさか達也があんな化け物級に強いなんてな・・・」
達也の隠された強さを知った俺の手には

手作りした二種類のCADの完成品が握られていた。

「これが俺の、秘策になるといいがな」

同類との邂逅 「ネタ (意味深)」

この世界は電車に変わる輸送手段として☒キャビネット☒が一般的になっているようだ。

少人数の積載を持つ小型の卵型の車両のようなものが速度別の軌道に沿って進む。

何時何分の電車で集合、ということができない代わりに、痴漢の被害やそのような濡れ衣を着せられることもない。

また、キャビネット内にはカメラ、マイクの類はなく、プライバシーが確保されている。

そして【第一高校前】駅で降りた俺は、CADを規則に則って事務室に預け、1年E組の教室に向かった。

そこで見知った(予想通りともいう)顔を発見した。

「よお、達也。この作品の現在の話数を求めろ。」

「おはよう、蒼。5話だろ?」

「ざあーんねえーん、執筆時点ではどう考えても4話だ。」

「なんでこんなメタい話になったんだ・・・」

「あの、おはようございます！」

話していると、(出席番号順のため)達也の隣の席の美月が話しかけてきた。いつちよ
こう返しとくか。

「やつはろー美月」

「あの、そのやつはろーって何ですか？ (苦笑)」

知らないのか!?

でもこの2095年にあのひねくれぼっち系(まちがつている。)青春ラブコメがどう
なっているか謎だな・・・

などと考えていると、

「やつはろー蒼、それに達也も美月もおはよう！」

「やつはろーエリカ。ノリがいいな」

「まあね」

エリカが乗ってきた。イイねイイねエ最高だねエ！ (某学園都市一位並感)

・・・少しアニメネタが多すぎたか。後悔も自重もしないけど。

「あたしも席近かったらよかったのになー」

「まあ俺は、席が離れててさらにほぼ一番前だしそれに比べたらマシだろ」

すると、達也が授業にも使われる机に備え付けの端末を起動した。

「何するの?」

エリカの問いに、

「選択科目の履修登録、終わらせようと思ってな」

達也が答えたのと、

達也が (脳波アシスト主流の世界で) キーボードオンリーの超高速入力を始めたのは
ほぼ同時だった。

「キ、キーボードで手打ち入力・・・!」

「しかもすごい速さですね・・・」

エリカと美月が驚きの声を上げた。

その場をこれに乗じて脱出(?) した俺は、ぱっぱと自分の登録を終わらせ、
達也達のところに戻ってきたのだが、

「なっ、テメーちよつとツラがいいからって調子こいてんじゃねーぞ!」

青年が声を荒らげる。口調から取れる印象とは違い、不良というより、ネタ枠に近い
ものを感じる。

「あーらモテないって凶星だったあ〜?」

エリカと、

前述した青年・彫りの深いゲルマン風の顔立ちの青年が口論（ただし青年が押され気味）をしていた。

詳しくはググ（以下略）。

・・・半分遊んでるな。（主にエリカが）

「なあ、達也。誰？」

その台詞に反応したのは達也ではなく、

「俺は西城レオンハルトだ。親がハーフとクオーターでな。純日本風の見た目なのにこんな名前だな。得意魔法は硬化魔法だ。レオでいいぜー！」

決して純日本風ではない容姿だが、それよりも、

「俺は荒海 蒼だ。よろしく。レオとはなんか（ネタ枠的な意味で）気が合いそうだ。」

「おう！俺もそう思ってたところだ！」

そして俺たちは、（半ネタ枠的な意味で）同類として握手を交わした。

普通とは（哲学）

そんな話をしていると、授業開始5分前の予鈴が鳴った。

それと同時に、教室に教師が入ってきた。

魔法科高校（正確にはこの世界の大半の高校）は、担任の教師が、直接教鞭を振るう、なんてことはない。

なのに、（それなりに見た目のいい）若い・20代であろう女教師が教室の前に立った。

「みなさん、入学おめでとうございませす」

ほかの生徒も戸惑いを隠せていない・・・だけど素で「あつ、どうも」って返しちゃうてるレオ、お前なあ・・・

「私はこの学校の総合カウンセラーの、小野おの遥はるかです。」

「この学校はカウンセリング体制が充実して・・・」

なんか説明始まった。長ながそそうう（小並感）

「プライバシーは量子暗号を・・・」

「ほわあくあ」

やつべ、あくび出ちやつたwまあバレてないしいつか。

・・・アノー、タツヤさん、呆れ顔でこちらを見ないでくれますか？

「もし履修登録まで終わっている人がいたら退室して大丈夫ですよ。・・・」

よし、退室しよう。(使命感)

ガタツ(俺が立ち上がった音)ガタツ(もう一人だけ立ち上がった音)ガタツ(立ち上がる人少なすぎて俺がズッコケた音)

俺含めても二人って・・・

しかもな、

貴様^{達也}、裏切つたなツ!

そんな感じ(どんな感じだよという突っ込みはスルーする)で教室から出た俺は、

工房へと向かった。

工房でばったり出くわした俺といつもの面子(達也、レオ、美月、エリカ)は、

昼食を取りに食堂に向かった。

さすが予算がある公立だけある。飯が美味しい！（歓喜）
すると、見覚えのある人影が。

「あ、（達也の愛する）妹さん来てるけど」

「「言葉にされていない何かを感じた（な）（ました）（よね）」」

「まあな」

ふつつつふ、俺は少し離れた席にいるから達也も（簡単には）秘孔をつけないだろオ

！

だが、深雪が遅い、何か口論になっている。

耳をそばだてると、

「わたしはお兄様と昼食を．．．」

という深雪の一言に、

「いやでも席が空いてないし．．．」 「そうだな」 「そうだよ」

一緒に座りたいがための口実乙。

よし、食い終わっているし丁度いい。

「俺ちよつと第六感で捉えられない何かを感じたから教室行ってくる」

「第六感で捉えられないもんをどうやって察知したんだよ（困惑）」

レオ、俺の真の意図に気づいていない。——114514俺ポイント。
そして俺は人ごみに紛れ聞き耳を立てる。

「でも深雪さん、やっぱり一科と二科のケジメはつけようよ」

「二科生と相席なんて・・・」

え、ここで一科と二科持ちだしたらあきまへんわ。

・・・第一高校の民度って思ったより低い・・・？

いやまだ決まった訳じゃないな。

しかし、その後も。

俺がラノベヒロイン系生徒会長の射撃実技を見に行つたときとか。

前に行ったから行つたんよ。

あの会長のことだしなんか前空いてものに後ろ行つたらなんか言つてきそうだし。

・・・さすがにそれは偏見か。

そしたら前になんで二科がいるんだー立場弁えろーとかうるさい。

ちなみにこの世代で射撃において最高レベルの逸材と呼ばれるだけあり、全弾命中。ラノベヒロ（以下略）生徒会長七草さんはすごかった、と言つておく。

そして、帰り。

達也と帰りたい深雪と、深雪と帰りたい（お近づきになりたい？）他の一科生がちよつとした口論に。（ほとんどが一科生がほぼ一方的にまくしあげていただけだが）

そして前の二件で不満を漏らしていたレオとエリカ・・・

「いい加減にして下さいッ！」

の前に、なんと美月がキレた。

「何の権利があつて二人の仲を引き裂こうとするんですか！そもそも（以下略

「み、美月っ？」「うおっ、どうした？」

さすがのエリカとレオも驚いた様子、

そして司波^元兄妹は、

「引き裂くだなんて、少し大げさじゃないか？」

「み、美月だったらいったい何をつ、なな何を勘違いしているのっ／＼／!!」

そこで顔を赤らめながらそんなそんな反応してるからこんなことになるんだよ
元司波兄妹オー!

「何故にお前が焦る、深雪?」

「えっ、焦ってなどいけませんよ!」

「そして何故に疑問形?」

「あんたたちこんな時に・・(呆れ)」

うん、このタイミングでそんな兄妹愛溢れる(?)微笑ましいやり取りしないでいただけませんか?

エリカに同意。ていうかお前さつきまで一科生に怒ってなかった?

一方、美月と一科生の口論にレオも参戦し、

「これは1—Aの問題だ!、他のクラスが、まして雑草ワイド如きが、僕たちブルームに、口出しするなッ!」

あーあ、いっちゃった☆

「同じ新入生なのに、今の時点で、一科生がどれだけ優れているって言うんですか!?!」
 と美月。ここはまだいい。

「これは不味いな・・・」

達也が危機を悟った。今更だな。

「教えて欲しければ教えてやるッ！」

一科生・・・民度低い。マイナス、百ポイン。

「おもしれえ、教えてもらおうじゃねーか！」

▼レオの 挑発！

こうか は ばつぐんだ！

いつかせい は、おこった！

「いいだろう、教えてやるッ！」

これが、才能の差だッ！」

するとずっと喋っていた男子の一科生が、特化型・・・拳銃型の攻撃的なCADを取り出した。

事務室から帰りに受け取ったのだろう。魔法にCADが必須と言うわけではないので、意味のない規制は行っていない。

一科生の魔法行使。暗黙の了解で注意するような生徒はいないしかしここで明記しておく。

攻撃的な魔法の無断で正当防衛にも当たらない魔法は、一部の例外を除き、法律違反である。

「解^アナリシシステム^ス眼、二挺管制機構^ム《デュアルシステム》、起動」

俺は、レオの挑発時からつけていた、バイザー（原作の達也のバイザーみたいな見た目）のシステムのひとつと、秘策の一つを、オンにした。
ロックオン
 標的にされたのは、レオのようだ。

レオは突進して食い止めようとしているが、他人の魔法に触れるのは危険だ。

エリカは警棒型のデバイスで弾き飛ばそうとしているが、さつきまで司波兄妹と話していたせいで反応が遅れた。

俺は左腕の汎用型ブレスレット型CADではなく、同じく左腕の小型仮想キーボードを叩いた。

そして俺はその生徒のCADの引き金にこの世界の魔法を掛けた。

特化型CADも、どの起動式（魔法陣とかシンボルとか詠唱を電子データ化して簡略化したもの）を使うか操作したら、実弾銃と同じく、引き金を引く。

俺がやったことは極めてシンプル。

「引き金が引けないッ・・!?」

引き金に硬化魔法を掛けた。それだけ。
それだけだ。

「蒼、お前そんな裏技持ってたのか・・・」

レオもびっくり。

「伊達に数年間厨黒二病歴ライフ作送ってきてないからな。」

「そういう問題か?」

「なんか、ご愁傷様だ」

レオと達也が様々な感想を漏らす中で（ちなみに他は一科も二科も絶句）、俺のバイザーが光子光を捉えた。

発生源をたどると、最も早く敵対心を思い出したと思われる一科の女子生徒だった。意識を集中して、認識能力を上げ、バイザーの文章を簡単に読み取る。

analysis system

{option}

魔法式：確認 進捗：12〜17% 魔法名：未登録

タイプ：光波振動系

予測効果：「閃光」マイナス「目くらまし（光系）」

干渉強度：C — ランク

威力：Dランク

・
・
・
・
・

もう見てる余裕はない。失明などには遠く及ばない威力だが、念のためだ。

小声で音声入力、

「サイオン、バレット」

指を銃の形にして、イメージを補完する。

自分の想子サイオンを絞り込み、指先から放つ。
想子サイオン・弾丸バレットを魔法式に俺が打ち込むのと、
第三者の想子サイオンが打ち込まれるのはほぼ同時だった。

やはり俺の発想はまちがっている。(小並感)

「やめなさいッ！自衛目的以外の魔法による対人攻撃は、校則以前に、法律違反です！」
叫ぶ声でかすぎ。閃光魔法を撃とうした女の子なんて力抜けて倒れかけてるやんだろ、

七草会長？

それに隣にいるのは・・・

「風紀委員長の渡辺^{わたなべ} 摩利^{まり}だ！君たちI―AとI―Eの生徒だな。事情を聴きます」

「起動式は展開済みです。抵抗すれば即座に魔法を発動します」

大物たちのパレードで草。

あ、達也が風紀委員長の前に立って弁解しようとしている。

だがッ！出番はもらっていくぞッ！達也^{ジョジョ}ッ！

さらに前に立つ。

「なんだ君は」

「俺は荒海蒼、宇宙人、未来人……じゃなかった、事情を説明しようと思ひましてね」

「なにを言おうと……まあいい」

「いや、一科生の方が、魔法を見せてくれるってことなんで、情報を仕入れておこうと思ひましてね」

「……なら——Aの生徒が攻撃性の魔法を発動しようとしていたのは何故だ？」

「あれは攻撃に部類されんのか……」カチャ（バイザーを外す）、ピ（キーボードとリンク）ピ（情報を入力）ピピピピピ……

「そのくらい常識だろう……とかまるで発動しようとした魔法が分かるみたいな言い方だな」

すると達也が、

「自分の目に見えたのは閃光魔法、威力もかなり抑えられていました」

さすが達也。お前の眼は伊達じゃないな。

「ほう、君は起動式から魔法が読み取れるのか？」

「この達也規格外は別ですよ。先輩はそういうデバイス持ってないんですか？」

「そんなデバイスあるわけないだろう」

達也も風紀委員長そろって否定・・・ということとは？

・・・これって当たり前すぎて見つかなかったんじゃない・・・？

・・・俺はとんでもないものを作ってしまった？

「デスヨネー」

「怪しむ」

「まさかそんなデバイスを持っているとか言うんじゃないだろうな？」

ま、不味いッ！

「ソナナワケナイジヤナイデスカー」

ガサツ（バイザーを隠す音）

・・・

（（（（こいつ確信犯だ（（（（（

「まあいいじゃない摩利」

「ま、真由美っ？」

ナイ ス ラ ノ ベ（以下略）会長 ツ
!!!

「蒼君に達也君、本当に見学だったのよね？」

「・・・会長もこう仰っているので、今回は不問にします。今後このようなことがないよ

うに。」

今回はラノベ（以下略）会長に助けられた。

だが、視線が雄弁に物語っていた。

へそのデバイス、あとで見せてね♪、あと、もちろんさっきのサイオン弾についてもね♪と。

他の面子（ただし司波兄妹を除く）は、単に気疲れで。

同じ反応をしてしまうのは、仕方ない。

「「「「「「はあ・・・（ため息）」「「「「「」

そういうえば、あの男子生徒がそこにいるな。

「助けてもらったなんて、思っていないからな・・・」

「おうわかった、じゃあ後で代わりにカフェラテ一杯奢ってくれい」

「・・・は？」

「助けてないってことは平等だろ？なら貸し一つでどーだってことだ」

俺はそれだけ期待をしているのだ、此処の一科生に。

この世界の魔法は独特だ。

だから故に、その魔法を純粋に上達した魔法師に、俺は期待していた。

「・・・」

「じゃあ、今度然るべき場所で、お前らの実力を見れることと、

カフェラテ、楽しみにしてるぞ」

ひと悶着終わって帰ろうとしてるところに、あの閃光魔法の娘と、一緒にいたクールな感じの少女の二人が走ってきた。

「あ、あの！」

「なんですか（早く帰りたいなあ）」

「1—Aの光井みつい ほかです、本当に、すみませんでしたっ！」

「「「は？（呆れ＋驚き）」」（蒼と少女×2以外）」

「別にいいから早く帰らせてくれ・・・（ω・ω）」（蒼）

「北山 雫です、ほかをかばってくれてありがとうございます」

なんつ、こんなところで時間を取られていたら、TSU○AY○のビデオが見終わらないじゃないか……!

「あ、あのっ」

ほのかとか言ったか、容姿は明るい髪色の活発そうな女の子……

詳しくはググ(以下略)。

「なんですか(早く帰らせてくれ……! 《逼真》)」

「駅まで一緒にしてもいいですかっ?」

「「「えっ」」」

そしてその後二人を連れてカフェに行くことが確定し、俺は

「はあ……」

大きなため息をついた。

説明回「深刻な説明力不足」

その後、カフェにやってきた俺は、質問責めにあっていた。

「あのつ、私の魔法式を壊した？魔法つて、何なんですか」（光井ほのか）「魔法式を読み取るデバイスか、考えても見なかったな」（達也）

「蒼、あの魔法つて何なんだ？」（レオ）「こら、他人の魔法式について訊くのはマナー違反じゃない、私も気にはなるけど」（エリカ）

「……これ以上一気に質問したら本気で帰るぞ、俺」

俺の発言に一同は黙ったが、

「それつて、これまでの質問には答えてくれるつてことにもなる」

という少女×2のもう一人のなんかクール系の（無口系？）の北山雫にこんなことを言われ、

「早く帰りたい・・・」

「こう一言漏らすのが俺にできた唯一の反撃だった。」

「順番に答えるぞ、まず光井さんのから」「ほのかでいいです」・・・じゃあほのかの質問から」

「まず、現代魔法の原理から解説しようかな」

「まず現代の魔法とは、事象に付随する情報体を書き換える技術らしい」

俺にとって魔法はこう、魔力を使ってアレするアレなのだが、この世界の魔法はそんなアレではないらしいからな。

・・・アレって表現大好きかよ。

「俺の大好きなゲームで例えよう。ゲームのプレイヤーからしたらゲームの世界は、一見映像で作りに出されたリアルな世界に感じる」

「しかし、本当は敵もプレイヤーもプログラムという数字の羅列でできている。この世

界もそんなもんらしいのさ、これが」

そこで俺は一度言葉を切った。

「達也、割と前の話だが、ゲームでズルって言ったらなんだか分かるか？」

達也は少し考え、

「俺はあまりゲームをしないからな・・・チートのことか？」

「ご明察。それで、チートが何をするかっていうと、自然と答えが見えてくる」

「プログラムの書き換えか」

俺は正解者達也にぱちぱちと拍手を送り、

「そう、プログラムがすべてを記述しているんだから、たとえば『プレイヤーの攻撃力は一兆だ』ってプログラムに書けば」

「攻撃力が一兆になるってことか、そりやそうだな」

レオの理解が追いついてきた。エリカはとづくに分かっていたようで、レオに呆れ顔を向けていた。

よく理解できるな、俺（主に作者）は説明が苦手なんだが。

・・・思うとむなしくなってきた。

まあいいや。説明をを続けよう。

「んでもって、現実にも物体オブジェクトに付随するプログラム・・・エイドスってやつがあるらしい」

もう説明疲れた、達也に任せりや良かったなと思いつつ、

「それで、それを書き換えてその物の状態を変えるのが現代魔法だ」

説明を終わらせた。

すると、ほのかが

「で、何で私の魔法は発動しなかったんでしょうか？」

という本来の疑問を投げかけてきた。

・・・まだ説明すんの？過労死しちゃうお（・ω・）

「要するに、魔法は物質の情報を書き換えるための文字の羅列にすぎない」

「その魔法式を書いている、墨やインクの代わりになるのが想子だ」
サイオン

「あの時俺と会長がやったのは、その想子の文字の一部を想子で吹き飛ばしたってこと
だな」
サイオン

俺が説明を終えると、達也が

「それは、会長はともかく、もしかしたら蒼がほのかにダメージを与えてたかも知れない
方式だな」

ばれてしまったかあ。無駄に鋭いなあ、さすが達也。

君のような勘のいいガキは嫌いだよ（うる覚え）

「じゃあここでエリカとレオの疑問に答えよう。俺は位置以外のほぼ全てを魔法式で定数にしている」

達也が感心したような顔になる。此処の魔法は、威力や干渉力、位置などを変数化して、自由度を高めている。

定数にして自由度を狭める方式は、一見不便に見えて、実のところ多くの魔法を吹き飛ばし、それでいて敵側の魔法使用者に

ダメージを与えない絶妙な定数は、非常に役に立つお。ほんとだお。

そして何より、変数が少なく演算する項目が減れば、魔法の構築速度が速まり、^{サイオン}想子の消費量も減る。

物によっては下手に変数化するよりいいこともあるんだよなあ、コレ。

「魔法式定数内コントロール方式無系統魔法、^{サイオン・バレット}想子弾丸」

ちなみに無系統魔法とは、^{サイオン}想子を何かの事象にせず、そのままの状態で操る技術だ。

そして説明をついに終えた俺。ならばやる事は唯一つ！

「んじゃ、帰るわ。」

「「「「「えっ（困惑）」」」」」

料金だけ机に置き、急いで店を出る。

なぜかって？もちろん

借りてきたごち○さのビデオを見る為だッ！

ちなみに作者と同じく最初のほうしか見れなかったのはまた別のお話。

放課後最終防衛ライン 「ゲーマーの決意」

「不幸だー！」（某学園都市在住ツンツン頭並感）

いやさ、聞いてくれよ、絶対愚痴りたくもなるってコレは！

まず、朝の話。

「深雪さん、達也君、蒼君、生徒会室に昼休みに来てね！」（ラノベ以下略生徒会長）

次に

「君、引き金だけ硬化させるとい魔法を使ったそうじゃないか、興味がある。昼休み、私のところに来たまえ」（甘楽先生という先生）

となると

「悪いけど、先生から呼び出されたんで行けなくなりました」（俺）

「えー、そんなー。じゃあ放課後にね！」（ラノベ以下略生徒会長）

早く帰らせろオーオーオー!!!

放課後Ⅱ至福の自由遊びほうけタイムやぞ！何をするだアー!!

・・・早く帰らせて下さい。お願いですから。

そして、

昼休みに甘楽先生のところにやってきた。↑イマココ

お説教ですかね。何年ぶりだろうか・・・

教授感のある人物だ。詳しくはググって下さいお願いしますから！

・・・メタい話、文庫で読んだイメージとアニメ版の画像見たイメージが違うんだ。察してくれ。

「君は、【ポリヒドラ・ハンドル】を知っているかな」

この人の得意魔法とは聞いたけど、何なんだろう、おいしいのかな？

「知らないですね、甘楽先生はその魔法がお得意なんですか？」

「まあ、そうだね。【ポリヒドラ・ハンドル】は物や物事を単純な多面体ポリヒドランの集合体として定義して、現代魔法の苦手な物の一部に魔法をかけるためのアプローチだね。」

「そうなんですか、では正確には技術といったほうがよろしいですかね」

「まあ、そうなるね、君は頭がなかなか切れるようだね」

面白い技術だなあ、それ。俺も何かに応用できないか考えてみよつと。

「それで、君は森崎君のCADの引き金……だけ硬化させたと聞いたからね、興味が湧いたわ

けだよ」

なるほどね。まあ、確かにそのスタンスは共感がもてるし、素直に答えさせてもらおうかな。

「僕の用いた魔法は正確には部品や役割ごとに分けるといいうほうが正しいですね。【パーツ・ハンドル】とでもしましょうか」

すると、甘楽先生は満足げに頷き、

「面白い考え方だね。それなら感覚的に行使できる人が増えるかもしれない、応用性のあるものだ」

公開する気があるとは言っていない。

・・・おい、今（ケチっぽいなあ）とか思ったやつ、ちよつと表出る。

そこに流れたのは、授業5分前のチャイムだった。

「そろそろ授業か。君も教室に戻りたまえ。次の発見を楽しみにしているよ」

はあ、助かった・・・

教室に入ると、達也が「風紀委員になれと言われた」と嘆いていたが、それはまた別のお話。

ま、他人事だな。

とでも思っていたのか。

放課後の行事を忘れていた。

司波兄妹と一緒に、生徒会室に入っていく。

「失礼します」

中には・・・

興味はない!!!

と言いたいところだが、なんか歩いてきた。あれか、副会長だったか。

「生徒会副会長の服部はつとり 刑部ぎょうぶです。司波深雪さん、生徒会にようこそ。」

あれ、俺らは？ま、いいか。

中には、某ラノベヒロイン生徒会長と風紀委員長の渡辺摩利、

そして会計の……誰だ？「市原鈴音いちばらすずねです」わお、空気読めるう。黒髪のクールな感じの少女。

あとは書記の金髪……というよりオレンジ色っぽい髪色のロリっ娘。たしか……中条なかしようあずさ。

といったところか。容姿についてはググってくれ。

「ていうか、俺なんで呼ばれたんですか？」

生徒会の呼び出しとか嫌な予感しかしねえよ。

すると、応えたのは、

「あ、そうそう。蒼を見て思い出した」

風紀委員長のほうだった。

「蒼は、風紀委員長がどうやって決まるか知っているか？」

「あれですね、あの部活連、教師、生徒会から3人ずつ選出され、9人の選挙で風紀委員長が決まる、みたいな。」

「そうだ。そして3年生が抜けた分の補充が必要なんだがな」
うん、それが？

「お前、教師枠から風紀委員に推薦されていたぞ」

・・・

・・・は？

は？

「ちよつと待ってください、その二科生二人の風紀委員会入り、私は反対します

魔法力の乏しい二科生ウイールドに、風紀委員は務まりません」

そう言ってくれたのは、服部副会長だった。

俺と達也の二人か。

・・・まあどうせろくな事にならないな、うん。

「じゃあ俺は辞退して帰ります、さいなら」

「ちよつと待て（待って）」

何だよ（以下略）生徒会長と風紀委員長。

「何故辞退するんだ？せめて理由は提示するんだ」

風紀委員長か、説明めんどい。

「副会長いわく、俺には向いていないとのことだったので。以上ですが」

「はんぞーくんが、また事態を面倒くさくしちゃったわね・・・」

はんぞーくん・・・副会長のことか。

・・・服部範蔵の家系なのか？

「他に理由はないんですか？」

オドオドしながら話しかけてきたのは書記の中条あずさだ。

・・・身内がやっちゃったからな。

なんか不憫だし、正直に言ってるよ。

「強いて言うのなら、放課後の至高の遊びタイムがなくなることですかね。」

ほら、オンゲやったり、アニメ見たり、某鉄華団団長のMAD見たり。止まるんじや

ねえぞ・・・

「そ、そんな理由なの・・・(困惑)」

生徒会長なんだろう。こんな思考回路の生徒、高校に良く居るだろ(偏見)。この程度で手こずってて大丈夫か？

「んじゃ、俺帰りますね。」

「ちよちよちよちよつと待って！」

「俺への話はまず副会長を説得してから後日、どうぞ」

だってなんか俺がやり込められて、やるって話になっても反対されたらめんどいじゃん(正論)。

まあホントは早く帰りたいだけなんですがね。

俺の作戦は完璧だ(フラグ)。

俺が部屋を出ようとしたその時、

「待っててください！」

え、俺？違うか。

「兄の評価が低いのは魔法力の評価基準が兄とあっていないだけです！」

実戦なら、兄は誰にも負けません!!」

ほう、実戦ねえ……

「司波さん、魔法師は常に冷静を心がけるべきです、

身臍に目を曇らせてはいけませんよ」

あ、妹キレたかな？

「そんなことはありません！ お兄様の本当の力を以てすれば……深雪ッ！」あ……」

これ言っちゃって良かったのか？

「副会長、俺と模擬戦をしませんか？」

お、珍しい、達也が好戦的だなあ。

「思い上がるなよ、ウイードの分際でッ！」

一応生徒会だよな、

禁止用語使ってまでブーメラン刺さってて草だわ」

副会長がこつち睨み付けてくるな。あ、声に出たかw
じゃあいつそのこと、

「そういう事なら。俺も乗ったぞ、その模擬戦。」

やるだけやるか。

・・・殺るじゃないお、ほんとだお。

「よし、試合は明日の放課後、第三演習室にて行なう。」

なんか試合になった。

ところで、

「今何時ですか？」

「6時ちようどだ」

．．．．

「俺今から帰りますね帰る確定事項だ帰るさようならッ！」

オンゲのゲリラクエストが6時半で終わるんだよおおおおお！

ノーデュエル・ノーライフ! (カードゲームじゃない方)

翌日。

「ではこれより、司波 達也 対 服部 刑部 の試合を始める。

用意、始めッ!」

風紀委員長、渡辺摩利の声が第三演習室に響きわたり、試合が開始された。

「? 認識強化?」

元いた世界の魔法で、認識を強化してみよう。

^{アナリシスシステム}解析 眼を見る限り、副会長は単一系でシンプルな移動系魔法。

達也は魔法を使つてない・・けどやたら早い。体術か。

副会長の目の前に立つて、引き金を引いた。

無系統 (想子^{サイオン}を直接操作する魔法) で、想子^{サイオン}の波を作っている。

それを副会長の右後ろ、左後ろでも行う。

ん、あれは、波の合成かな?

副会長の位置で波が合わさつて、

副会長がぶつ倒れた。

・・・は？

なにそれ、波紋でも流し込んだの？カエル越しに岩を砕けんの？

「？解除？」

認識が元の速さに戻る。

「しよ、勝者、司波達也！」

反応はそれぞれ、

ラノベ（以下略）七草会長や中条あずさ、摩利風紀委員長は「な、なにをしたのかわからんけどすごい」って感じ、

市原鈴音は感心しつつ何をしたのか考えている感じ、

妹は小さく声に出して「さすがはお兄様です・・・」

はいはいさすおにさすおに。

・・・ハツ、俺はいつたい何を・・・

「何をしたんだ？」

とりあえず聞いてみる。

「魔法師は想子サイオンを知覚するが、その副作用として大きな想子サイオンの波を当てられると、揺ら

れたと錯覚して《酔ってしまっ》んだ」

「読者にわかりやすく今北産業」

「サイオン
想子の波、

感じとる、

酔う」

「とりあえず作者の語彙力がゴミだってことはわかった」

「凄いことをするのね・・・(感心)」

七草会長再起動。

「そういえば、俺の試合は？」

せつかくだしフルボッコにして殺r・やろうと思ったのに。

一瞬本音が出た気もするが、気のせいだろ。

「とはいえ、蒼の實力は未知数だしな・・・」

好戦的なのは再起動した摩利委員長。

「じゃあ、ご自分で試されてはどうです？ニヤニヤ」

煽っていくスタイルツ！！

「ほう・・・それも面白そうだな（売られた喧嘩は買う主義）

「じゃあ、俺vs副会長 戦は中止、俺vs風紀委員長 戦を入れるってことで」

「まだ時間はあるそうか？」

「あるにはあるけど・・・摩利、やりすぎないようにね？」

「わかってるさ」

そんなこと言っつて、慢心は身を滅ぼすぞ。（ブーメラン）

カット

「ほう・・・まだ隠し玉があったとはな」

俺の装備は、

【バイザー (アナリシスシステム搭載)】

【複数CADコントロールドール用コンピューター】

そして、

【汎用ブレスレット型CAD】

× 4 ツ !!

さらに、

【特化型拳銃形態CAD】

以上!フルアーマー俺のコーナーでした!

「摩利、蒼君、準備はいい...?」

用意、始めっツ!!」

「さあ、ゲームを始めよう」

「システム、オールアクティブ」

「?エアロフェンス?」

余分なの2つと真面目なの一つ、

気合を申し訳程度に入れて放ったその魔法は、

あまりにも呆気なく弾かれた。

あの技術は？領域干渉？。

干渉力だけを定義した魔法を周囲に放ち、それより弱い魔法を弾く技法だ。

そりゃ、勝てないわ。だって、俺、二科生だもん。

ま、そのための。

「？エアロダンス？」

足元で暴風をはじけさせることで、機動力を上げる。

※常人はマネしないでください、バランス崩して・・・＼(´o´)／オワタ

視た感じ委員長の魔法は俺の奇策を警戒してシンプルな魔法のようだ。

ということだ魔法をうまい感じによけつつ、

干渉力を溜める（常人以下略）

そして、特化型を・・・

投げ
る
!!

「何っ!？」

さすがに避けられたかーやっぱりw

計画通りだ (ゲス顔)

「?マグネティックミドルコントロール?」

汎用から魔法を引き出し、

磁力で特化を引き寄せる!!

そして、どうせギリで躲すだろう。

そのための

汎用型。

「?エレクトロ組み伏せドール?」

本来であれば干渉力的に効果を表さなはずの魔法は、

「後ろからだとツ!!」

一瞬の意識のスキをつけて、発動した。

そこからはまるでコマ送りのように、

風紀委員長の右足、左手、右手に制御用コードを無線にしたブレスレット型CADが俺の魔法で巻かれ、

それぞれが移動系や磁力操作で体を巻き込んで床につき、

「うぐうっ!」

加重系で重くなった特化型が背中と肩にかけて押さえ込む。

複合系魔法「エレクトロ組み伏せドール」。

その圧迫感と組み伏せられて意識が定まらないうちに、
審判ラノベに目で訴える。

「しよ、勝者、

荒海、蒼君っ」

わあああ・・・

それぞれの驚きと称賛など様々な感情のこもった声を聴いた俺は、

「で、帰っていいですか？」

帰りたい。

その後、風紀委員長の反撃結局風紀委員長の推薦もあって、風紀委員会に入る羽目になってしまった。

「放課後時間帯イベント・・・お前のことはきつと忘れない・・・」

(((((なんか、ご愁傷様))))))

設定集 ()

設定集です。

「散々待たせてこれかよ！」という方はすいません・・・
では、どうぞ。

〈荒海 蒼〉

性別：男

職業：学生、冒険者兼旅人、魔法鍛冶

異名：科学魔法使い、???、???

所属：ギルド『???』、魔法科大学付属第一高校一年E組

出身：『拡張世界』（オリジナル世界）

見た目：細身で黒髪。黒い瞳だが特定の能力を使用したときのみ変色

武装：CADなど自作したものたくさん

技能：ある程度の格闘、剣技、弓術、銃術、などなど

【魔法（拡張世界）】 【魔法（魔法科世界）】 【??眼】 【魔法鍛冶】 などなど

印象

達也 「気楽なのか何か考えているのかわからない人物」

深雪 「お兄様と同レベルの何かを感じる（裏がありそういう意味で）」

エリカ 「見どころのある青年（戦闘的な意味で）」

レオ 「面白くて賢い奴」

美月「何か隠していそうな人」

〈司波 達也〉

性別：男

職業：学生、???、
????

異名：???、???、
???、???、
???

所属：魔法科大学付属第一高校一年E組、
???、
???

出身：魔法科世界

見た目：長身で ああ・・・静かで知的なラノベ主人公・・・って感じ。

武装：特化型CAD2丁「シルバー・ホーン トライデント」その他オプション武装

技能：【九重八雲式体術】 【魔法（魔法科世界）】
【??】 【??】

印象

蒼「警戒して損はない人物（○）」

深雪「お兄様（絶対的信頼）」

エリカ「見どころのあるイケメン（いろんな意味で）」

レオ「面白くて賢い奴」

美月「何か怪しいけど頼りになる人」

〈千葉 エリカ〉

性別：女

職業：学生

異名：???

所属：魔法科大学付属第一高校一年E組、千葉家

出身：魔法科世界

見た目：活発な印象で明るい髪色のショートヘア。

武装：???
警棒

技能：【千葉家式白兵戦術】 【魔法（魔法科世界）】 【??】

蒼「近づかれなければ問題ないクラスメイト（↑戦闘大好き）」

達也「明るいクラスメイトの戦闘力もある少女」

深雪「お兄様の友達、自分の気の置けない女友達」

レオ「憎めない奴」

美月「何か頼りになるお茶目な友達」

〈柴田 美月〉

性別：女

職業：学生

異名：なし

所属：魔法科大学付属第一高校一年E組

出身：魔法科世界

見た目：引っ込み思案な印象で黒髪眼鏡っ娘。

武装：特にはなし

技能：【眼】 【魔法（魔法科世界）】

印象：

蒼 「無害なクラスメイト（↑戦闘大好き）」

達也 「落ち着いたクラスメイトの少女」

深雪 「お兄様の友達、自分の友達」

レオ 「もの静かな友達」

エリカ 「守ってあげたくなる友達」

〈西城 レオンハルト〉

性別：男

職業：学生

異名：なし

所属：魔法科大学付属第一高校一年E組

出身：魔法科世界

見た目：活発で茶髪のボケ担当（突っ込みも可）。

武装：???

技能：【魔法（魔法科世界）】【??】

印象：

蒼「近接戦ならなかなかできるクラスメイト（↑戦闘大好き）」

達也「気の置けない友達」

深雪「お兄様の友達、（蒼と同じく）ムードメーカー」

美月「活発で無茶しそうな子」

エリカ「憎めない奴」